

至近距離から見た独裁者の素顔

松本侑壬子・ジャーナリスト

戦後60年目にして初めてドイツ人自身の手で作られたヒトラー映画。ヒトラーに関する著作は世界中に5万3千冊も出版されているというが、回想録『最後の時間まで：ヒトラー最後の個人秘書』は当時うら若い女性秘書だったトラウドゥル・ユングの手になる至近距離から見た独裁者の人間像を描く。

1942年11月の深夜、東プロイセンの深い森の奥にあるヒトラーの指令本部にナチス親衛隊将校に護衛された個人秘書候補の数人の若い女性が向かう場面から映画は始まる。謎めいて自らを神格化させたヒトラーの人物像に近づく印象的な場面である。それから2年半後の4月20日、迫り来るソ連軍の砲火を避けてヒトラーは少数の身内や側近らと共にベルリンの首相官邸地下にある堅牢な要塞へ退却、そこで12日間の抵抗の後、最後の日を迎えた。ヒトラーゆかりの地ミュンヘン出身ということで採用されたユングは、この2年半の間、至近距離からの歴史の証言者となった。

地下要塞にはナチス将校ら軍人と共にヒトラーの18年来の愛人であるエヴァ・ブラウンやユングら女性職員、宣伝相グッペルス夫人と6人の子どもたちなどがいた。ヒトラーは、冷徹な独裁者である一面、こうした女性や子どもには気遣いすら見せる時もあった。刻々と報告される地上の戦闘は明らかに連合軍側に有利で、側近らは一時的な退却を勧める。しかし、ヒトラーは次第に常気を失ってゆき、ありもしない総攻撃による徹底的反撃の夢にすぎる。もはやこれまでとヒトラーを見限り、くしの歯が欠けるように側近らが姿を消していく。側近中の側近である全ドイツ警察長官

ヒムラーもその一人だった。残ったものは極度の緊張と絶望感の中を、エヴァを中心に酒とダンスの退廃的なパーティに恐怖感を忘れようとする。

地上では、最後まで祖国と首都ベルリン防衛のため子どもまで動員して抵抗を続ける狂信的な民兵らがいる一方、それに同調しない市民は裏切り者として親衛隊の手で射殺されるなど、まさに地獄絵の様相を呈していた。地下の要塞では、悪名高い宣伝相である夫以上にヒトラーの狂信的崇拜者であるグッペルス夫人が、ヒトラーの最後が迫っていることを悟ると、幼い子どもたち全員に無理やり致死量の毒薬を飲ませ、自らはピストル自殺を遂げる。「ドイツ国家がなくなれば、生きていく意味はない」というのが彼女の言葉である。まるでヒトラーの「国家がなくなれば、市民など存在しない」という言葉に呼応しているかのようである。ユダヤ人大量殺害などで知られるヒトラーの思想の恐ろしさが、こうしたエピソードからひしひしと伝わってくる。エヴァと簡単な結婚式を挙げた翌日、ヒトラー夫妻はピストル自殺し、遺体は遺言どおり部下の手によってガソリンで焼かれた。

オリヴァー・ヒルシュピーゲル監督は、1957年ハンブルグ生まれ。ヒトラーの時代は体験していない世代である。ヒトラーを演じたブルーノ・ガンツは敗戦時4歳だった。カメラテストで撮られた自らの映像を見て「あまりに自分がヒトラーに似ているので、困惑した」と語っている。勇気あるユングの回想記を得て、長い間ドイツ映画では“タブー”であったヒトラーについて、ついに真正面から描いたのが本作である。監督らの勇気と誠実に敬意を表したい。



ドイツ映画(155分)／オリヴァー・ヒルシュピーゲル監督

『ヒトラー ～最後の12日間～』

シネマライズ他全国順次公開中

